

匂いの記憶

昭和32年、小学2年の夏休み、姉と一緒に初めて帰省した父の故郷・和歌山の実家、僕にとってその時の記憶

帰省して驚いたのは漬物類の美味しさ、大阪ではタクアンを美味しいと感じたことがなかったが、おばあちゃん

が漬けるタクアンなどの漬物は、子供にもわかる適度の酸味と旨味が入り混じったもので、薪と鉄釜で炊くアツアツの炊きたてご飯と一緒にお腹いっぱいいただくのが大好きになった。

タクアンにする大根や茄子や胡瓜などの野菜畑に撒く肥料が、あの下肥えだと知って驚いた。牛糞や鶏糞も不可欠な肥料だということも後で知った。当時の僕には自然が循環しているという知識はなかったが、それまでは臭くて汚い便所のイメージが大きく変わったのは間違いない。

当時、大阪の我が長屋も汲み取り式で、トラック一台がやっと通れる幅の路地に汲み取り車が来て、最初の頃は桶を担いだおじさんが家々の路地を通して裏にある汲み取り口から柄杓で汲み取り、トラックの荷台のタンクに担ぎ上げていた。そのうち

桶からバキュームホースに変わったが、水洗トイレが普及するまでかなりの期間、汲み取り車の匂いの思い出は残っている。

田舎に帰省してボンヤリ目覚めたのは、排泄のことを忘れて食の楽しみを語れないんだなど。美しいものも汚いものも両方あってどちらも大切、美しい仕事にも汚れる作業があり、一見汚い仕事も思い込みの部分がかなりあるということ。

日々の生活が滞らず回るのは、汚れ作業をしてくれる誰かのおかげだと思うようになった。



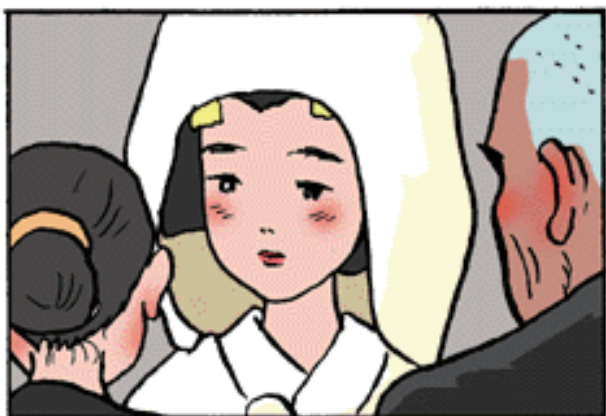
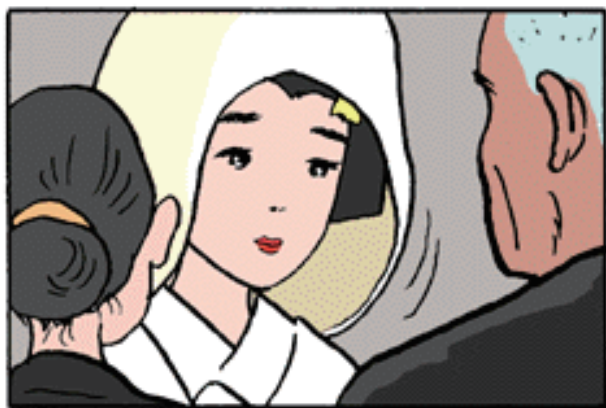
「田舎に着いて、大阪とは全くちがう匂いにとまどう」

は匂いの記憶でもある。澄んだ空気、青々とした田んぼと青草の匂い、農耕用に一頭飼われていた巨大な牛のいる牛小屋、隣合わせの人用の汲み取り便所と牛糞の混ざった匂い、都会の大阪では知らなかった匂い体験が強烈だった。

昼は蝉の声、夜になると田んぼにいる殿さまガエル達の鳴き声にぎやか、化学肥料や農薬をほぼ使わない当時の農家は、昔ながらの汲み取り便所の中の物は下肥えに利用するため早朝に父の兄のおじさんが桶に汲み取り、天秤棒に担ぎ発酵用の野井戸へ運んでいた。

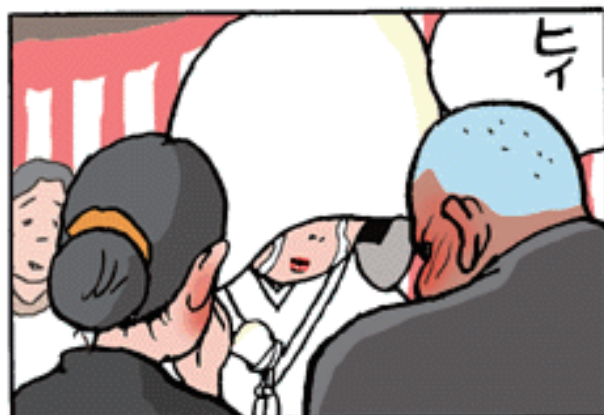
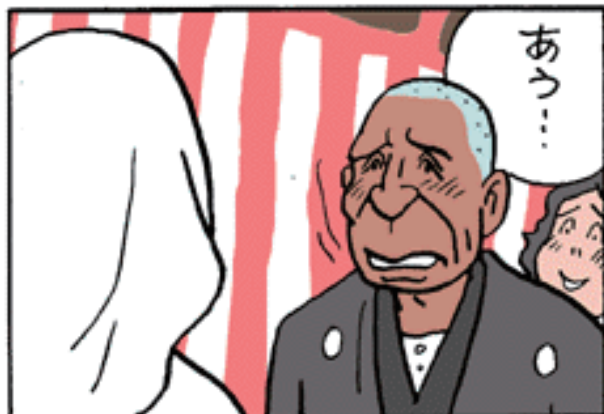
やアハにみ日記
東成区の昭利 

(366) お嫁さん



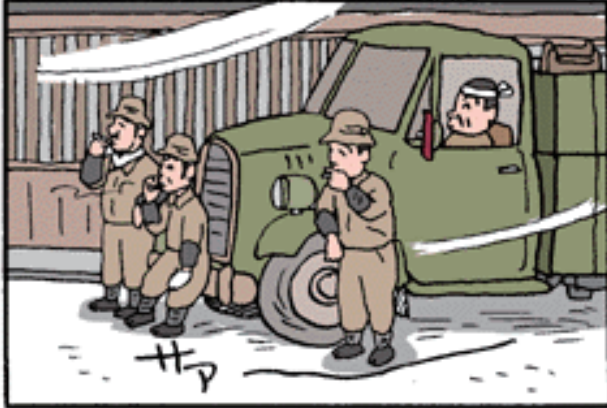
やアハにみ日記
東成区の昭利 

(367) お嫁さん



やぶにみ日記
東成区の昭利 

(368) お嫁さん



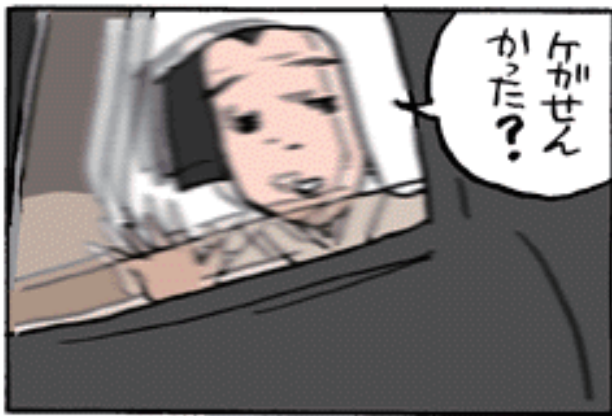
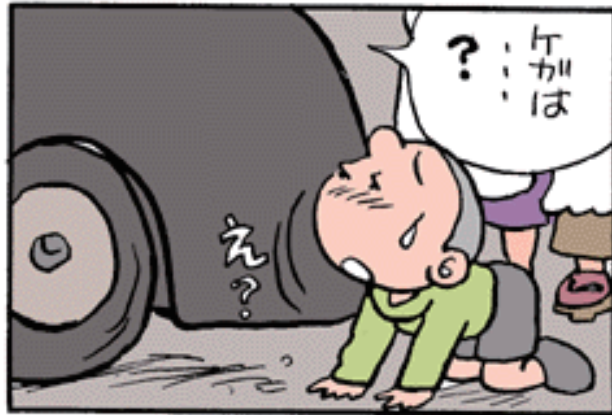
やぶにみ日記
東成区の昭利 

(369) お嫁さん



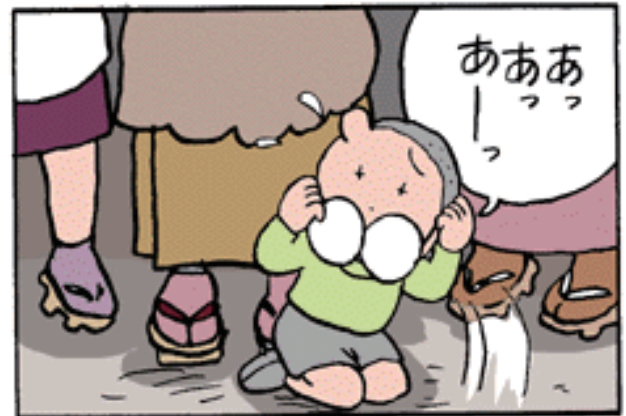
やアにみ日記
東成区のお福

(370) お嫁さん



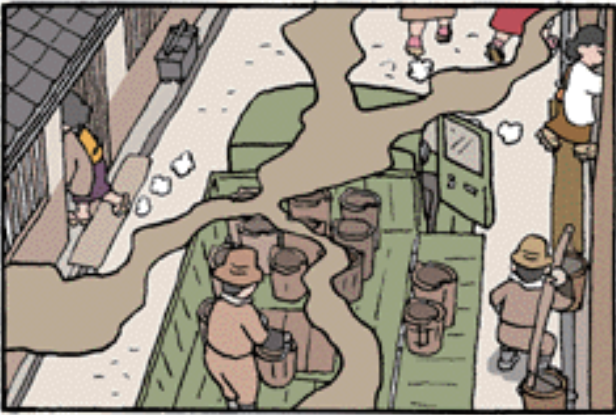
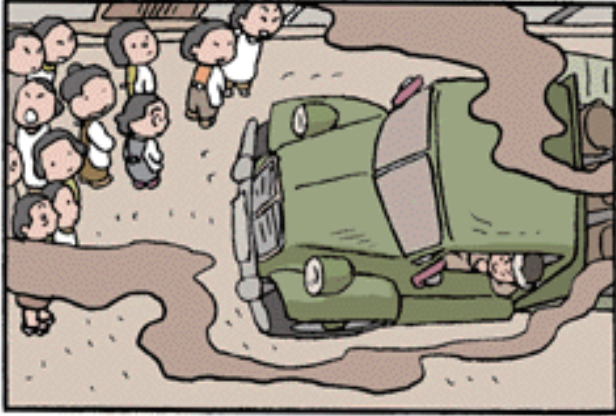
やアにみ日記
東成区のお福

(371) お嫁さん



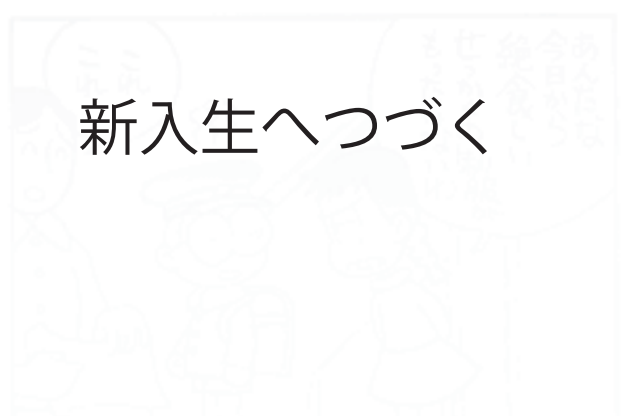
やぶにらみ日記
東成区の沼利 

(372) お嫁さん



やぶにらみ日記 (373)
東成区の沼利 

(1) 新入生



新入生へつづく